

## 人文科教育研究室の歩みをめぐって

湊 吉 正

「人文科教育研究」も第10号を発刊する運びとなった。めでたいことであり、うれしいことである。そこで、本誌にゆかりの深い東京教育大学並びに筑波大学の人文科教育研究室のこれまでの歩みをめぐることどもを、簡単に書きつけておきたい。

昭和24年4月、東京教育大学教育学部教育学科第11講座として人文科教育講座が設置され、昭和28年4月には、そこに大学院教育学研究科の一環をなす修士課程・博士課程が設置された。その発足時より昭和39年3月まで、石井庄司先生が講座主任としてこの講座の充実に尽力された。福村保氏（弘前大→千葉大）、高森邦明氏（富山大→筑波大）は、この間大学院で石井先生のもとで研究を進められた方々である。昭和20年代には桜庭信之先生、昭和30年代には池永勝雅先生が外国語教育担当として在任された時期があった。

昭和39年12月より昭和49年3月までの間、倉澤栄吉先生が講座主任として石井先生の後を継がれ、その発展に尽力された。また、昭和41年11月より昭和45年3月まで、滑川道夫先生が専任のスタッフとして在任され、倉澤先生とともに多くの俊秀を育成されたことは、特筆すべきことであろう。

昭和46年4月には、博士課程在学中であった伊藤嘉一氏が文学部外国語教育研究施設助手（→東京学芸大）に就任され、昭和47年4月には、同じく博士課程在学中であった桑原隆氏が教育学科助手（→都留文科大→東京教育大→筑波大）に就任された。同じ昭和47年4月には、私も千葉大学から人文科教育講座の助教授に転じ、倉澤先生を補佐することになった。

昭和49年3月、倉澤先生が停年退官されたその後の2年間、お茶水女子大学の外山滋比古先生が併任教授として講座の運営に尽力してくださった。また桑原隆氏が都留文科大学に転じられた後、昭和50年4月から約1年間、博士課程在学中であった有沢俊太郎氏が教育学科助手（→文教大→富山大→上越教育大）として在任され、研究室の運営に協力してくださったことも忘れがたい。昭和52年4月からは、桑原隆氏が都留文科大学より人文科教育講座の講師に迎えられ、私とともに、昭和53年3月の東京教育大学の閉学、筑波大学への移行に伴うさまざまな処理にねばり強く当たってくださった。

倉澤・滑川、倉澤・湊、外山・湊、湊・桑原と専任のスタッフが在任した昭和40年代から昭和50年代の初め、東京教育大学の閉学時のころにかけて、多くの俊秀が学部・大学院で学習を積み研究を深め、着実に力をつけて学界・実践界に巣立っていったことを特記しておかなければならない。金英子氏（江陵大）、木村滋氏（秋田大）、炭谷哲夫氏（都立武蔵村山高）、望月重信氏（明治学院大）、川口幸宏氏（埼玉大）、首藤久義氏（秋田大→文教大→千葉大）、土屋賢治氏（都立城東高）、鈴木公江氏（旧姓渡辺）、常木正則氏（秋田大→新潟大）、葉秀治氏などの方々の名をあげることができる。

東京教育大学が閉学への道を歩んでいくのに並行して、筑波大学が開学の運びとなり、教官の研究組織として教育学系が設置され、その教科教育学領域の一分野として人文科教育学が位置づけられることになった。昭和51年4月には大学院博士課程教育学研究科が発足し、人文科教育講座もしだいにその実質を筑波の方に移していくことになった。

新しい教育学研究科は、従来の修士課程をその前期課程に内包した形の5年一貫を旨としたものであるが、そこで、東京教育大学の博士課程の途中で筑波大学の移管院生となった方、東京教育大学の修士課程修了後、筑波大学の博士課程3年次に編入学した方や大学院研究生になった方などさまざまな場合が生じた。小谷悠紀子氏（東京電機大）、新名主健一氏（鹿児島大）、横田勉氏（埼玉県立熊谷女子高）、望月善次氏（岩手大）、島村直巳氏（国立国語研究所）、塚田泰彦氏（滋賀県立彦根東高→筑波大附属駒場中高→富山大）、藤田正春氏（カリフォルニア大バークレー校→上越教育大）などの諸氏は、それぞれ立場も異なり在学の時期や期間も違うけれども、「東京教育大→筑波大」の移行過程に深くかかわりつつ学的な自己形成を行ってきた方々である。

昭和50年ごろから筑波大学に大学院修士課程教育研究科を新設すべく実際の準備が開始され、国語教育コース、英語教育コースが他の教科教育関係コースとともに昭和53年4月より発足することになった。英語教育コースが現代語・現代文化学系を中心に運営していく形をとったのに対し、国語教育コースは、教育学系と文芸・言語学系とが協力しつつ運営していく体制がとられた。昭和53年4月、国語教育コース発足の際に高森邦明氏を富山大学より教授としてお迎えすることができた。国語教育コースは、昭和55年3月、山川信一氏（桜陰高）、生野金三氏（大学院研究生）を最初の修了生として世に送り出してから今年3月まで、4回にわたり毎年気鋭の士を国語教育界に送り出してきた。

昭和50年秋、それまでの長い期間にわたった院生の方々の悲願がようやく実り、本誌の創刊号が刊行された。外山滋比古先生の強いお勧めが一つの契機となり、当時の院生の方々の熱意と実行力がそれを実現させることになった。そして、東京教育大学の閉学した昭和53年春には、第5号が刊行されていた。昭和53年3月末、石井・倉澤・滑川の諸先生をはじめ、ゆかりの方々の御出席を得て、東京教育大学教育学科人文科教育研究室との別れの会が催されたことが昨日のことのように想い起こされる。

筑波に移行した直後の昭和53年6月には、「人文科教育学会」の創立総会が開かれた。桑原隆氏や当時博士課程在学中であった島村直巳氏などが中心となってその実際の準備に当たってくださった。かくして本誌も第6号からは、この新発足の「人文科教育学会」の機関誌として正式に位置づけられることになった。その後、着々と形式面の整備とともに内容面の充実が達せられてきていることは、よろこばしいかぎりである。さいわい、現在博士課程・修士課程に精鋭がつどい、これまでのよき伝統を継承しそれをさらに発展させていく構えにあることは、まことにたのもしい。藤田正春氏などの努力が実って、今年4月から定例の研究会も発足した。このような若手の会員や先輩の会員の方々の研究活動の進展が本誌の発展に寄与し、さらに関係学界に貢献していくことを願っている。